

# 中国語の自動詞述語受身表現<sup>1</sup>について ——インターネットで用いられる“被就业”のタイプを例として

路浩宇

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

---

充当现代汉语被动句谓语的动词必须是及物动词,不及物动词一般不能用在被动句中。随着语言的发展变化,近年,一些不及物动词甚至是名词、形容词充当谓语的被动形式相继在网络上出现,并被广泛使用。本文将从被动句谓语他动性的角度,对网络上出现的“被就业、被自杀”(以下简称“被X”)这一类被动形式的结构特征和语义特征进行分析,既而指出由不及物动词充当谓语这一现象所带来的被动句结构上的变化(例如:不出现施事宾语)以及一些成分的功能上的变化(例如:主语可充当施事),同时,根据语义的不同,“被X”这一形式可以划分为“被强迫”类和“被说成”类。最后,对此类被动句中的被动标志(“被”)的词性以及功能作出简要的分析。

---

**关键词:** 被动句 不及物动词 他动性 因特网

## 0. はじめに

角田三枝・佐々木冠・塩谷亨(2007)は「他動性」について、「目的語があること」と「動作が主語から目的語に向かう、または及ぶこと」の二つの要素を指摘している。要するに、他動性の強い動作が実施される際には仕手と受け手の両者が存在しなければならない。「他動性」というのは動作の受け手が仕手から働きかけを受けることによって、変化が生じることである。

马真(1997:164)は受身文の述語について、“从结构上来说,‘被’字句里的动词也必须是一个及物动词,而且它的前后也总要有一些别的成分。[構造上からいえば,“被”構文における動詞は他動詞でなければならない。さらに,その他動詞の前後に他の成分が必要である。]”と指摘している。しかしながら、近年では、“被就业”、“被精神病”、“被富裕”などのように、自動詞と一部の名詞、形容詞を伴う受身表現がインターネット上に出現し、頻繁に使われるようになっている。

本研究では主にインターネット上で用いられる他動性を持たない動詞、名詞、形容詞が用いられる受身表現を中心として、他動性の度合いという観点から、それらの構造的特徴と意味的特徴を明確にした上で、プロトタイプ的な受身文との相違点をまとめる。

## 1. 自動詞述語受身表現の構造的特徴について

### 1.1 自動詞述語受身表現の実例

中国のウェブサイトから引用された実例について、動詞、名詞、形容詞がそれぞれ述語となっているケースに分けてみる。

(1) a 多次举报“白宫”书记张治安,没有自杀动机的李国福在监狱医院“被自杀”

---

<sup>1</sup> 本稿は述語が名詞・形容詞となっている場合とあわせて、自動詞が受け身となったケース(以下「自動詞述語受け身文」と称する)について考察する。また、中国語の受身文では“被”、“叫”、“给”等が用いられる文を指すが、本研究においては、収集した実例がすべて“被”を用いる文であるため、“被”構文のみを受身表現とする。

2。(百度百科)

[「ホワイトハウス (豪邸のこと) (を持つ) 書記の張治安を何度も検挙し、自殺の動機がない李国福が刑務所の病院で「自殺したことにさせられた」。]

b 神奇的就业率让学校为我代签就业协议书, 不明真相中我“被就业”。(百度百科)

[就職率操作のため、学校が私に代わって契約をし、真相不明のうちに、私は「就職したことにさせられた」。]

(2) a “被精神病”：河南网友因帮助残疾人状告政府被当成精神病送进医院接受治疗。(百度百科)

[「精神病と言われる」：河南のネットユーザーが障害者に政府を提訴することを幫助したとして、精神病として入院させられた。]

b 笔者想知道的是, 这其中有多少是“被网瘾”的? (新华网)

[筆者が知りたいのは、その中で「インターネット依存症とされている」人はどのくらいいるのかということだ。]

(3) a 让群众从“被幸福”走向真幸福。(新华网)

[大衆を「幸福だとされる」から真の幸福へ行かせる。]

b 在有关部门的统一部署下, 当地群众一夜之间“被小康”。(百度百科)

[関連部門の手配のもとで、現地の人々が一晩のうちに「小康状態になったとされた」。]

上の例 (1)、(2)、(3) ではそれぞれ受身文の述語部分に動詞、名詞、形容詞が用いられている。この他に“被失踪”、“被离婚”、“被富裕”などを用いた例も見られる。ここで、受身形で用いられている述語はいずれも他動性を有しておらず、目的語を取れない。これは一般的な他動詞述語受身表現の文法的特徴と異なっているという点で、注目に値する。本稿では便宜上、それらを一括して「自動詞述語受身文」と称する。

## 1.2 受身標識である“被”と述語の結合関係

一般的な受身表現では、動作の受け手が主語になり、仕手は受身のマーカー“被”の後に置かれる。例えば、

(4) 敌人进了地道, 没走几步, 就被民兵消灭了。(劉月華 1991 : 644)

[敵は地下道に入って何歩も行かないうちに民兵によって殲滅された。]

(5) 卓玛被解放军救活了。(劉月華 1991 : 644)

[チュオマは解放軍に命を救われた。]

ここでは、受身のマーカー“被”は仕手である目的語を導入する働きをしている。また、仕手である目的語がなくても、文脈から仕手と受け手の関係が明確となっている場合も認められる。例えば、

(6) a 狗被踢了一脚。(劉月華 1991 : 642) [犬は一発蹴とばされた。]

b 狗被 (警察/孩子/…) 踢了一脚。[犬は (警察/子供/…) に) 一発蹴とばされた。]

例 (6a) では動作の仕手は文面には表れていないものの、実際には犬を蹴とばした人物 (例えば、(6b) のような“警察”や“孩子”など) が存在している。しかし、自動詞述語受身文では“被”と述語の間に目的語成分を入れることはできない。

<sup>2</sup> 本稿で使用した“被～”の部分の引用符「“ ”」は筆者の追加したものではなく、すべてインターネット上からそのまま引用したものである。引用符の使用は、発話者 (その文を入力した者) が“被+自動詞/名詞/形容詞”という使い方を一般的な受身文と異なった、特殊な表現として認識していることを示すものと思われる。

今回筆者が収集した例文を見る限り、用いられていたのはいずれも“被绯闻”、“被富裕”、“被小康”、“被神经病”、“被开心”、“被和谐” などのような動詞化された名詞や形容詞が“被”の直後に付加する形であり、その中に“被”と述語の間に仕手目的語成分が入った例は一つも見られなかった。こうした場合、仕手目的語を入れるとかえって不自然になる。例えば、

(1) a' ?多次举报“白宫”书记张治安，没有自杀动机的李国福在监狱医院“被 {书记张治安/警察} 自杀”。

[「ホワイトハウス (豪邸のこと)」を持つ書記の張治安を何回に検挙し、自殺の動機がない李国福が刑務所の病院で {書記の張治安/警察に} 「自殺したことにさせられた」。]

b' ?神奇的就业率让学校为我代签就业协议书，不明真相中我“被 {学校} 就业”。

[就職率操作のため、学校は私に代わって契約をし、真相が不明のうちに、私は {学校に} 「就職したことにさせられた」。]

例 (1a) と例 (1b) はそれぞれ仕手目的語成分を入れると ((1a') と (1b'))、不自然になる。

ここで、一般的な受身文の構造と自動詞述語受身表現を一般化すると、次のようになる。

一般的な受身文：

N (受け手主語) + “被” + O (仕手目的語) + V (述語動詞) + α (“了” / 補語)

自動詞述語受身表現：

N (主語) + “被” + ○○ (自動詞/名詞/形容詞)

劉月華 (1991:641) では、“被”は「仕手を導入する働き」と「受身を表す働き」の二つの機能を有すると指摘されている。上の公式から、自動詞述語受身表現においては、仕手目的語が出現しないことがわかる。要するに、自動詞述語受身表現における受身のマーカー“被”には「仕手を導入する働き」の機能がなくなり、「受身を表す働き」の機能しか残らないことがわかる。これは一般的な受身表現とは異なっている。

## 2. 自動詞述語受身表現の意味的特徴について

近年新たに用いられるようになった自動詞述語受身文はそれ以前の“被”構文と同様に受身の標識を用いてはいるものの、それらの述語の表す意味的特徴が“被”構文とは異なっている。その意味的特徴について、次の 2.1 および 2.2 で詳しく検討していく。

### 2.1 “被强迫”類

中国語において、通常、余儀ない行為を表現する場合は、“S+不得不+VO”あるいは“S+不得以+VO”のように動作主を主語として能動文で表現することが可能であるものの、近年では、「余儀なくされる」という意味を表す受身の形がインターネット上で多くみられる。該当する実例を以下に挙げておく。

(7) 钢铁大亨发妻“被离婚”。(新浪网)

[鉄鋼ボスの妻が「離婚を強いられる」。]

(8) 谢亚龙三人“被协查”、已超 72 小时。(新闻晚报 2010 年 09 月 08 日)

[謝亞龍たち三人は「調査に協力させられ」、すでに 72 時間に超える。]

(9) 我在不知情的状态下，就莫名其妙地“被捐款”。(新浪网)

[私は内情がわからないうちに、(強制的に)「寄付金を出させられた」。]

- (10) 近日某网站做起了“被全勤”现象调查, 数据显示, 超过三分之一的网友没有享受过带薪年假, 这种逼你拿全勤奖的公司不在少数。(百度百科)

[最近、あるウェブサイトが「皆勤にさせられる」現象の調査を行っている。データによると、調査を受けた人の三分の一は有給休暇を楽しんだことがない。このようにむりやり皆勤賞を取らせる会社が少なくない。]

- (11) 两个月募捐 38 亿, 神木县“被慈善”。(财视网)

[二ヶ月のうちに 38 億元を募金した神木県は「慈善活動をさせられた」。] この類の代表として、ここでは例 (7) の“被离婚”を取り上げる。“被离婚”の成立には、次のような経緯がある。即ち、夫の操作によって、妻は内情が分からないうちに、「夫と離婚する」ということになってしまった。そこで、「妻子被离婚」という表現は妻が「不本意」に「被害を蒙る」という意味を表すものとして使われている。例

(8) も同じように、警察の強要が原因となって、謝巫龍たち三人は不本意ながら調査に協力することになったという意味を含んでいる。

これらの意味特徴をまとめてみると、動作主が他者の行為によって、不本意にある行為を行うという共通点を見出すことができる。このような意味特徴を持つため、“強迫”という強い他動性を有する動詞が“被”と述語の間に入っても、文は成立する。即ち、「被”+〇〇」という形は「被”+強迫+〇〇」という形に変換可能である。

「被”+〇〇」 → 「被”+強迫+〇〇」

被协查	被强迫协查
被离婚	被强迫离婚
被捐款	被强迫捐款
被全勤	被强迫全勤
被慈善	被强迫慈善

このため、「被”+強迫+〇〇」という形式は、言語表現として述語動詞の“強迫”の意味を表す部分が言語化されておらず、受身標識の“被”と他者の関与が引き起こす結果の複合形式として理解しても支障がない。また、「A が強いられ、～をした」という意味特徴からみれば、「被”+〇〇」という構造における「〇〇」は動作主の動作であるといえる。本稿では、自動詞述語受身文のこのタイプを「被強迫”類」と呼ぶことにする。

## 2.2 “被说成”類

2.1 における「被”+強迫+〇〇」の意味的特徴と異なり、次の「被”+〇〇」の形は動作主が V という行為を行うか否かにかかわらず、「動作主が V にしたと伝えられる」という意味特徴を持つ。このタイプを実例でみる。

- (12) “被精神病”:河南网友因帮助残疾人状告政府被当成精神病送进医院接受治疗。(再掲 (2 a))

[「精神病と言われる」: 河南のネットユーザーが障害者に政府を提訴することを幫助したとして、精神病として入院させられた。]

- (13) b 神奇的就业率让学校为我代签就业协议书, 不明真相中我“被就业”。(再掲 (1b))

[就職率操作のため、学校が私に代わって契約をし、真相が不明のうちに、私は「就職したことにさせられた」。]

- (14) 职工平均工资每统计一次, 我的工资就“被增长”一次。(百度百科)

[職員たちの平均給料の統計を取るたびに、私の給料は「増えたことになっている」。]

- (15) 正在某地采访报道的某记者不知了去向，多日后家属得知他被拘留，这才知道他是“被失踪”了。(再掲)  
 [某所で取材していた記者が行方不明になったのが、数日後、彼は拘留されたという情報が家族の耳に入って、ようやく彼は「失踪したことにされた」ことが明らかとなった。]
- (16) 在有关部门的统一部署下，当地群众一夜之间“被小康”。(百度百科)  
 [関連部門の手配のもとで、現地の人々が一晚のうちに「小康状態になったとされた」。]
- (17) 让群众从“被幸福”走向真幸福。(再掲 (3 a))  
 [大衆を「幸福だとされる」から真の幸福へ行かせる。]
- (18) 笔者想知道的是，这其中有多少是“被网瘾”的？(再掲 (2 b))  
 [筆者が知りたいのは、その中で「インターネット依存症とされている」人はどのくらいいるのかということだ。]
- (19) “工资够高存着不用”，中国老百姓又“被富裕”了。(新华网)  
 [「高い給与を貯金して使わず」、中国の庶民はまた「豊かになったと言われた」。]

このタイプの代表として、例 (12) の“被精神病”を用いて、その成立の背景を説明する。有力者の B は自分の意志に反する行為を行おうとする A の自由を拘束するために、A を「精神病」という理由で入院させた。「被精神病」という表現は、A が実際には“精神病”ではないという事実がありながら、不幸にも被害を蒙っているという意味を示している。

意味の上では、動作主が実際にその動作を実行していないにも関わらず、他者の判断なり、うわさなりで周りの人たちにその動作が実行されたかのように受け止められているという特徴が見出せる。

以上の分析をまとめてみると、「A が V したと (B に) 広められる」という意味特徴は、動作主が事実と相違する状況を伝聞されることによって、間接的に被害を受けているというニュアンスを表すことがわかる。このため、次のような変換が可能になる。

「被」+○○	→	「被」+说成+○○
被精神病		被说成精神病
被就业		被说成就业
被增长		被说成增长
被失踪		被说成失踪
被小康		被说成小康
被幸福		被说成幸福
被网瘾		被说成网瘾
被富裕		被说成富裕

以上の変換から、左側の「被」+○○には“说成”という述語動詞が付加され、他動詞述語文になっても、意味が変わらないことがわかる。言い換えれば、「被」+○○という形式は述語動詞の“说成”の意味を表す部分が言語化されておらず、受身標識の“被”と他者に伝聞される動作主の状態を表す語の結合形式である。本稿では、自動詞述語受身文のこのタイプを「被说成」類と呼ぶことにする<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> 自動詞述語受身文については、その意味的特徴に基づいて、基本的に“被强迫”類と“被说成”類の二つのパターンに分類することができる。しかし、自動詞述語受身文には、これら二つのパターンには分類できない例も

### 3. 自動詞述語が導く特殊性

自動詞述語受身文においては、プロトタイプ的な受身文と異なり、動詞、名詞、形容詞が述語になることと仕手目的語が出現しないことの二つの特徴がある。また、これらの特徴が受身文における文成分の特殊性をもたらしている。次に、自動詞述語表現における主語の振る舞いと受身のマーカーである“被”の性質について分析していく。

#### 3.1 主語の振る舞いについて

受身文は受け手が主語になるのが一般的である。しかし、自動詞述語受身表現の仕手が主語になるという点は一般的な受身文とは異なっている。以下、自動詞述語受身表現における主語の振る舞いについて、具体例を通して分析していく。

(1) a' ?……李国福在监狱医院“被 {书记张治安/警察} 自杀”。(再掲)

[……李国福が監獄の病院で {書記の張治安/警察に} 「自殺したことにさせられた」。]

(1) c 李国福在监狱医院自杀。

[李国福が監獄の病院で自殺した。]

一般的な受身文では、述語動詞が表すのは「仕手が受け手に働きかける動作・行為」であるものの、自動詞述語受身文の述語動詞がはそうではない。まず、例 (1a') の述語動詞をみってみる。“自杀”は主語の自主的な判断で行った行為を説明し、確かに主語の“李国福”が行った行為である。例 (1a') は主に「李国福が監獄の病院で自殺した」(例 (1c)) の内容を表している。この場合“自杀”の動作を行った“李国福”を受け手ではなく仕手として認識するほうが適切である。例 (1a') の述語動詞が表すのは「仕手が受け手に働きかける動作・行為」ではなく、「動作主が自主的に行う動作・行為」なのである。仕手目的語の位置にある“书记张治安”や“警察”などの人物は“李国福自杀”という事件を引き起こす原因となっている。要するに、受け手が主語になる典型的な受身文と異なり、自動詞述語受身文は、仕手が主語になるという特徴がある。

次に、自動詞述語受身文と一般的な受身文の対照を通じて主語の役割を分析する。前述の通り、自動詞述語受身表現は“被强迫”類と“被说成”類の二つに分類することができるのだが。まずは“被强迫”類の例をみまよう。

(22) 我在不知情的状态下, 就莫名其妙地“被捐款”。(再掲 (9))

[私は内情がわからないうちに、(強制的に)「寄付金をさせられた」。]

(23) a 我<sub>1</sub>被强迫。[私は強いられる。]

b 我<sub>2</sub>捐款。[私は寄付金を出す。]

例 (22) には例 (23a) と (23b) の意味が含まれている。まず主語の“我”は行為を強いられる対象でありながら、「寄付金を出す」という動作の主体でもある。そして例 (23a) における“我<sub>1</sub>”は受け手であるのに対し、例 (23b) の“我<sub>2</sub>”は仕手である。ことから、例 (22) の主語は仕手と受け手の二つの役割を有するといえる。例 (22)

存在する。例えば、

(20) ……没有自杀动机的李国福在监狱医院“被自杀”。(再掲 (1a))

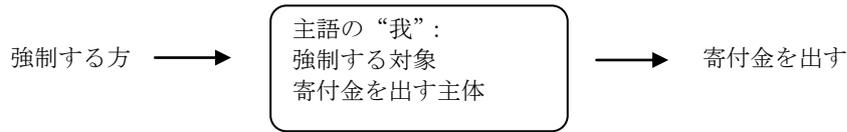
[自殺の動機がない李国福が刑務所の病院で「自殺したことにさせられた」。]

(21) 白岩松“被自杀”多次。(新华网)

[白岩松は「自殺したという噂」が何回も流れた。]

例 (20) と (21) はいずれも“被自杀”が用いられている文であるものの、それぞれの“被自杀”の意味は異なる。例 (20) が「実際には殺された人が自殺したと言われる」意味であるのに対し、例 (21) の方は「自殺したという事実が存在しない人物が自殺したと言われる」という意味である。今後、自動詞述語受身表現における多義現象について詳しく分析していく。

における主語の役割を簡単に図示すると、次の【図1】のようになる。



【図1】

【図1】からも明らかなように、強制する主体と寄付金を出す主体は同一ではない。主語“我”は第一段階（「私が強制される」）の受け手であり、第二段階（「私が寄付金を出す」）の仕手でもある。このように“被強迫”類においては、主語が仕手と受け手両方の役割を果たしているのである。

次に、“被説成”類における主語の役割を分析してみる。

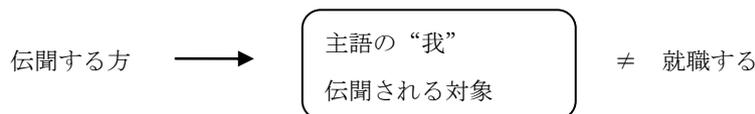
(24) b 神奇的就业率让学校为我代签就业协议书, 不明真相中我“被就业”。(再掲(1b))

[就職率操作のため、学校が私に代わって契約をし、真相が不明のうちに、私は「就職したことにさせられた」。]

(25) a 我<sub>1</sub>被説成…。[私は～と言われた。]

b 我<sub>2</sub>就业了。[私は就職した。]

“被説成”類の実例である例(24)は例(25a)の意味を含んでいるものの、(25b)の意味は含んでいない。つまり、例(24)は「主語の“我”が実際には就職していないにもかかわらず、他人が勝手にそう言っている」という状況を描写しているのである。そして例(25a)における“我<sub>1</sub>”は受け手であるのに対し、例(25b)の“我<sub>2</sub>”は仕手である。ことから、例(24)における主語は動作の受け手の役割しか持たず、仕手の役割を持たないと言える。例(24)における主語の役割を図示すると、次の【図2】のようになる。



【図2】

【図2】から、例(24)における主語である“我”の働く段階は一つしかないことがわかる。つまり、“被説成”類における主語は伝聞される対象であり、述語の表す動作行為の仕手ではないといえる。

ここで、“他被強制綁走了。[彼は強引に連行された。]”を例に、一般的な受身文の主語の役割をみてみよう。



【図3】

【図3】が示しているように、強制する実行者と連行する実行者はいずれも同一主体

である。一方、主語の“他”は常に影響を受ける方であり、受動的な役割を担っている。

以上のように、自動詞述語受身表現と一般的な受身表現では、主語が他者に強制されるという特徴は共通する場合が存在するが、述語の動作行為を実行する動作主であるか否かという点では異なっているといえる。

### 3.2 受身のマーカーである“被”の性質と役割について

王力(1980:430)は、動詞としての“被”には“覆盖”[覆う、被る]以外にも、“蒙受”[受ける、蒙る]、“遭受”[遭う]の意味もあると指摘し、また、“古汉语带‘被’字的被动式, 主要是用于‘表示不幸或者不愉快的事情的’”[古代中国語において、“被”構文は主に「不幸或いは不愉快を表す」際に使用される]と述べている。(同上:432)

近年、受身マーカーとしての“被”がどのような品詞であるかを考察した研究が数多くみられる。これらの研究では“被”は動詞、前置詞、助詞の三種類のものに分けられている。

朱德熙(1982:178)、赵元任(1980:380)、劉月華(1991:642)、黄伯荣・廖序东(2003:37)などでは、“被”を前置詞として取り扱っている。劉月華(1991:641)では、“被”の「仕手を導入する働き」と「受身を表す働き」という二つの機能を指摘している。また、吕叔湘主编(1980:56)において、“被”は受身文では前置詞として、受身を表すフレーズにおいては助詞として認識されている。前置詞としての“被”は、動作行為の仕手を導く機能を具える(例えば、他被大家选为代表。[彼は皆に代表に選ばれた。])。助詞としての“被”は動詞の前に置かれ、受動の動作を表し、単音節の動詞と結び付いて、フレーズを作ることができる(例えば、“被捕”や“被窃”)と述べられている。これらに対し、“被”を動詞として捉えるのが洪心衡(1956:29)および橋本(1987)である。両者とも“被”の文法的機能は前置詞ではなく動詞であり、“被”が付いているフレーズは他動詞の目的語であると主張している。

《现代汉语词典》(第6版)においては、“被”を「前置詞」、「助詞」、「動詞」の三者の機能が含まれている兼類語として扱っている。吕叔湘主编(1980:56)では、「前置詞」や「助詞」としての扱いは《现代汉语词典》(第6版)と共通している。しかしながら、筆者は“被就业”や“被小康”などの表現における“被”の品詞が「前置詞」や「助詞」ではないと思われるのである。

本研究では自動詞述語受身文の意味特徴の立場に立ち、“被就业”や“被小康”などの表現における“被”の意味的特徴を分析していく。

前述のように、“被……”類表現は仕手目的語を取れない。仕手がもたらす影響の引き起こす結果が“被”の直後に表れる。自動詞述語受身表現における“被”がなければ、どのような変化が生じるのかについて、次の“被”を用いる例と用いない例でみってみる。

a “被”を用いる場合： 我的工资“被增长”了。 = 我的工资被(说成)增长了。

b “被”を用いない場合： 我的工资  $\phi$  增长了。 = 我的工资增长了。

2.1 と 2.2 において、インターネットで用いられる「“被”+○○」表現は一般的な受身表現とは異なり、「“被”+强迫+○○」や「“被”+说成+○○」と理解することができることを述べた。このため、“被”を用いる a は「給料が前と同じであるものの、上がっていると言われる(昇給は見かけだけである)」のように理解することが可能である。一方、“被”を用いない例 b は「昇給は事実である」という意味で、a とは異なる。a と b の相違から、自動詞述語受身文における“被”は単なる受身を表

す機能上での標識だけでなく、実質的な「～と言われる」という意味を持つものであるといえる。要するに、“被”は文法的な機能だけでなく、実質的な語彙意味も有する。これは前置詞や助詞が文法的な機能しか持っていないこととは矛盾する。

以上、自動詞述語受身文における“被”の意味的特徴について分析を行った。次に“被”の具える機能を検討していく。ここでは、「“被”+強迫+○○」の実例をみてる。

(8) 谢亚龙三人“被协查”、已超 72 小时。(再掲)

[謝亞龍等の三人は調査に協力させられ、すでに 72 時間を超える。]

(8)’ 谢亚龙三人被强迫协查、已超 72 小时。

[謝亞龍等の三人は強制されるため、調査に協力してすでに 72 時間を超える。]

例 (8)’ は“某人强迫谢亚龙三人”と“某人让谢亚龙三人协查”の結果である。白川 (2001: 126) は、使役文が用いられる場合は次の二つであると指摘している ((26) と (27) はそれぞれその対応例である)。

① X が V しようとしているか否かを問わず Y が X に働きかけて V させる

(26) 母親は息子に一生懸命勉強させた。(白川 2001: 126)

② X が V しようとしている (または実際にしている) のを、Y が妨げないことによって X に V させる (またはし続けさせる)

(27) 子どもたちを遊ばせておいて、その間に買い物に行ってきた。(白川 2001: 126)

例 (8) は“谢亚龙三人”の意志に関わらず、他人が“谢亚龙三人”を強制的に協力させるといふ使役の意味が含まれている。これは白川 (2001: 126) が述べている使役文の使用条件の①に合致する。こうしたことから“被”は本来単なる受身の標識であるにもかかわらず、機能上は、使役受身の働きを果たしていることがわかる。

#### 4. 小結

以上、インターネットで用いられる自動詞述語受身表現の構文特徴と意味特徴を検討してきた。まとめると、次のようになる。

(一) 構文的特徴:

自動詞述語受身文では、仕手目的語は出現しない。

(二) 意味特徴:

自動詞述語受身文の「A + “被” + ○○」という構造形式は、“被強迫”類の「A が V することを強制される」と“被说成”類の「A が V したと広められる」の二つのパターンに分類される<sup>4</sup>。

(三) 受身標識である“被”の性質:

自動詞述語受身文には“被”を通して、他動性の度合いを補充し、不幸や被害を蒙るというニュアンスを伝達するようになる。さらに、自動詞述語受身文における“被”は「強制される」や「伝聞される」と理解され、劉月華 (1991:641) に指摘される文法機能(「仕手を導入する働き」と「受身を表す働き」の二つの機能)しか持たない“被”とは異なり、文法的な機能だけでなく、実質的な語彙意味も有する受身文のマーカであるといえる。

<sup>4</sup> 筆者の参考資料の実例によると、“被強迫”類では、「“被”+動詞」の構造を持つものが多く、「“被”+名詞/形容詞」の構造を持つものは比較的少ない傾向が見られた。一方で、“被说成”類の方が「“被”+名詞/形容詞」の形が多く用いられている。自動詞述語受身表現の構造的特徴については、今後さらに詳しく論じることとする。

(四) 主語の役割：

自動詞述語受身文は、一般的な受け手主語受身文表現と異なり、仕手を主語とする新しい形の受身表現である。主語が他人の強制を受けるといふ視点からいえば、受け手であるものの、他人の影響によって、自主的にある言動を行うといふ視点からいえば、仕手として理解することも可能である。要するに、自動詞述語受身文の主語は仕手と受け手両方の役割を担うものである。

自動詞述語受身表現は構造の上で一般的な受身表現とは違いが存在するものの、「不本意的な状況で、噂をされたり、不幸や被害を蒙ったりする」といふニュアンスを表す固定的な表現としてすでに定着している。以上の意味的特徴に合致すれば、“被”の後ろに他動性の低い語を置くことも可能である(例えば、“被”と他動性の低い動詞“加班”を組み合わせ、“被加班”になる。この表現は「上司の命令によって、不本意的に残業する」の意味を表す)。目下のところ、このような文型はインターネット上で主に用いられているものの、今後、新しい用法として広く受け入れられ、定着するか否かについては、さらに注目していく必要があるといえよう。

参考文献

- 洪心衡 1956. 《汉语语法问题研究》新知识出版社。  
黄伯荣・廖序东 2003. 《现代汉语》(下) 高等教育出版社。  
吕叔湘 主编 1980. 《现代汉语八百词》商务印书馆。  
马真 1997. 《简明实用汉语语法教程》北京大学出版社。  
桥本万太郎 1987. 〈汉语被动式的历史・区域发展〉《中国语文》第1期, 36—49。  
王灿龙 2009. 〈“被”字的另类用法——从“被自杀”谈起〉《语文建设》第4期, 65—66。  
王还 1959. 《“把”字句和“被”字句》上海教育出版社。  
王力 1980. 《汉语史稿》(中) 中华书局。  
赵元任 1980. 《中国话的文法》香港中文大学出版社。  
朱德熙 1982. 《语法讲义》商务印书馆。  
劉月華主编 1991. 『現代中国語文法総覧』(上、下) 相原茂 監訳 (《实用现代汉语语法》の邦訳) くろしお出版。  
白川博之 監修 庵功雄等 2001. 『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。  
角田三枝・佐々木冠・塩谷亨 2007. 『他動性の通言語的研究』くろしお出版社。